



創作狂言「ちばわらい」ガイド



「千葉笑い」とは、昔、千葉寺で大みそかの夜に人々が素性を隠すために頭を覆い、面をかぶって集まり、奉行・役人の不正から近所の者、親兄弟に至る人々の行動の善悪を言い立てて、大笑いした行事のことです。人々はこの行事で笑われないように身を慎んだと言われ、江戸時代の俳諧師・菊岡沾涼による『本朝俗諺誌』（1746〔延享3〕年成立）でも、「自然のよき教訓也」と称賛されています。またこの行事は、江戸時代の文芸にも影響を与えており、冬の季語として多くの俳諧に詠まれました。

明治時代以降は廃れてしまいましたが、1913（大正2）年、作家・岡本綺堂が数少ない文獻からイマジネーションを膨らませて「千葉笑い」という史劇を執筆し、1926（大正15）年に芝草劇場で上演されました。この史劇がモチーフとなり、「千葉笑い」は今では民謡の一つとなっています。

今回上演する「ちばわらい」は、これらを基にした創作狂言です。

狂言について

狂言は能と双子のような存在として演じられてきた舞台劇です。能が主にシリアスな題材を、狂言がコミカルな題材をテーマとしているのが特徴です。神に祈りを捧げる神事と、大陸から曲芸の技として伝わってきた散楽が出会い、室町時代に能狂言として大きく発展しました。狂言は、室町時代末期まではあらすじのみで伝わっていました。江戸時代には武家式楽となり台本化され、繰り返し演じられる中で磨かれて、現代に継承されています。

狂言の笑いは、風刺諷刺を含みつつも大らかで素朴なものです。誰しも経験のある失敗や、つい愚かなことをしてしまう狂言の登場人物たちの姿は、いつの時代も変わらない、私たち人間の映し鏡のようでもあります。

古く新しい普遍的な笑いを、ぜひお楽しみください。

■参考資料

- ・小島貞二『千葉笑い』恒文社（1988）
- ・石橋満寿男『千葉説：方言集』東京文芸館（1996）
- ・平山輝男編『千葉県のことば』明治書院（1997）
- ・国立国語研究所編『全国方言談話データベース 日本のふるさとことば展 第5巻 埼玉・千葉』国書刊行会（2002）
- ・小林貴（監修）油谷光雄（編）『狂言ハンドブック』第三巻 三省堂（2008）
- ・井筒雅風『日本服鑑 男性編』光村推古書院（2015）

千葉弁について

「ちばわらいっちゅうおんもせ行事に参るとすっべ！」
意味は何となく分かるけど普段耳にする言葉と少し違うような…？ そう、これが「千葉弁」です。実は、千葉県にも方言があるのです。

一括りに千葉弁と言っても、大きく分けてと野田弁、東総弁、房州弁の3つがあります。しかし、これらは話されている地域が違うだけで、それほど大きな違いはないとされています。また千葉県北西部は東京の通勤圏内なので標準語を話す人が多く、方言はあまり使われないようです。

冒頭の一文にある「おんもせ」は「面白い」という意味、語尾につく「べ」は「～だろう」「～しよう」を表す助動詞として使われます。つまりこの一文は、「ちばわらいっという面白い行事に行ってみよう！」という意味になります。

千葉県内を旅行した時には、是非それぞれの地域の言葉に耳を傾けてみてください。

最後に、千葉のことばに関するクイズを3問。皆さんは千葉弁マスターになれるでしょうか？（正解は右下）

レベル1：「たまげる」 レベル2：「けもだし」 レベル3：「くじゃろー」

衣装

狂言では衣装のことを「装束」と言います。役柄の年齢、身分、職業などにより装束は異なります。ここでは、例として「太郎冠者」「大名」の装束を紹介します。

＜太郎冠者＞



太郎冠者の装いは狂言装束の代表の一つです。縮髪斗目と呼ばれるチェック柄の小袖をまとっています。召使でもある太郎冠者が身に着ける装束は、当時の庶民の典型的な服装です。（写真：小笠原弘晃）

＜大名＞



能・狂言に登場する大名などの果報者（長者）は、舟型の烏帽子や長褌など、武家装束の一つであり礼服として用いられていた装束を着ています。（写真：小笠原由阿）

肩衣を作ってみました

袖がなく肩と背だけを覆った紋付の衣装を肩衣と言います。狂言で使用されるものには縞や芭蕉の葉、コウモリなど大胆な意匠のものもあります。

今回の公演では、この肩衣を千葉大学の学生が作成しました。千葉ならではの意匠を凝らしたデザインです。何が描かれているか、お楽しみに。

◎面に注目

創作狂言「ちばわらい」に登場する太郎冠者と殿様は、面をかけています。使用されるのは、能楽面作家でもある小笠原由阿師が作成した面です。そちらにもぜひご注目ください。



太郎冠者：吹か面
（小笠原由阿作）



殿様：不動明王面
（小笠原由阿作）